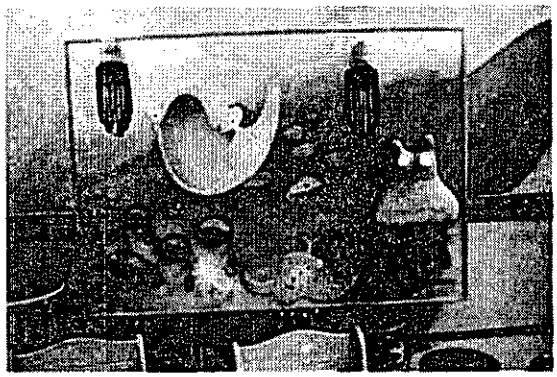
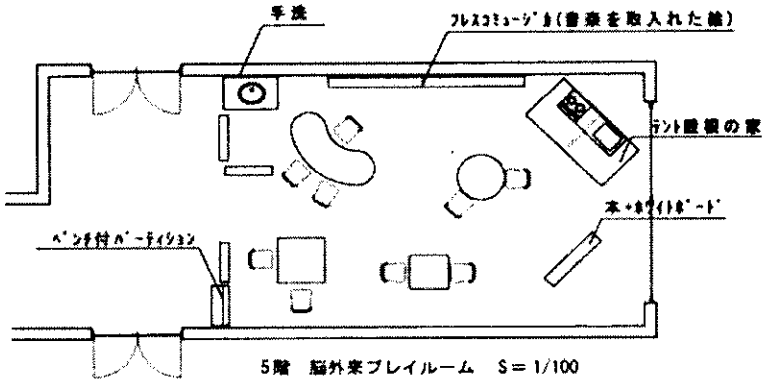
ミュージシャンと楽器

手洗い器



b e -1　　フレスコミュージカ（音楽の壁）



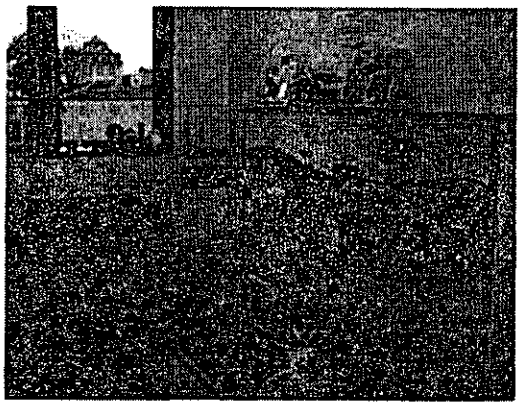
ビセートル中央病院 -1

らなかった女の子（すでに Myelein さんが担当して1年近くになり、車いすに座っていた）も、徐々に手に持った楽器を鳴らそうとするようになった。また他の子ども達も少しずつ輪に加わり音楽を楽しんでいた。それを見守る親も共に参加し楽しんだ。参加した私達も慣れないフランス語の曲ではあったが、リズムにあわせ音を出すことが楽しく有意義な時間を過ごした。

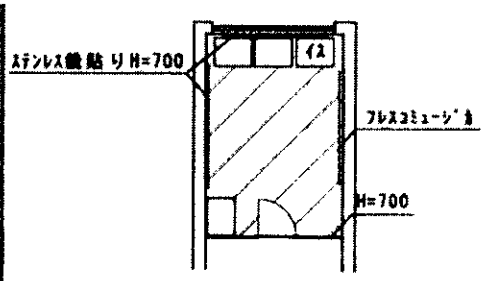
② 肝臓消化器科（黄疸のある1才の男児）

最初は大勢の知らない人がいる事に驚いた表情をしていた男児も、すぐに母親と音楽に参加した。自分の好きな様に楽器の音を出したり声を出したり体を使って踊ったり非常に楽しそうにしていた。そのうち点滴をした他の子どもが加わり、音楽の輪が広がった。聞いたり、触ったり、声を出したり見たりあらゆる感覚器を使った音楽療法は心のやすらぐ1つの手段であると思われた。

(3) 外来での音楽療法



新生児室音楽の壁とプレイルーム



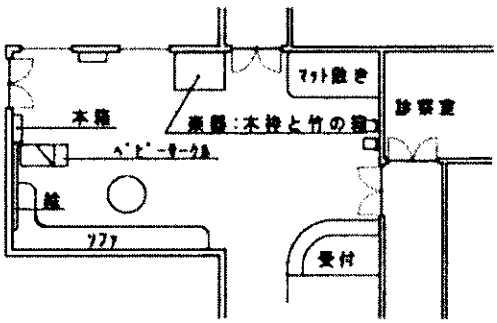
新生児室ﾌﾟﾚｲﾙｰﾑ　S=1/100

•廊下の突出り部分を仕切り、床にﾏｯﾄ敷き

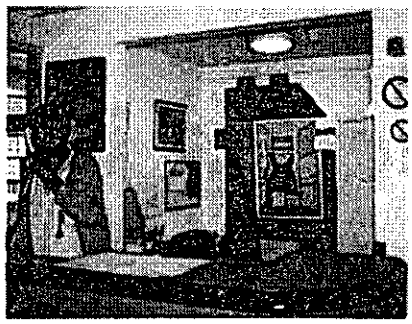
•床から腰までの高さに幼児用の遊具、ｽﾃﾝﾚｽ鏡、ﾌﾚｽｺﾐｭｰｼﾞｶ

b e -2

楽器を組み込んだ遊具



外来待合室　S=1/200



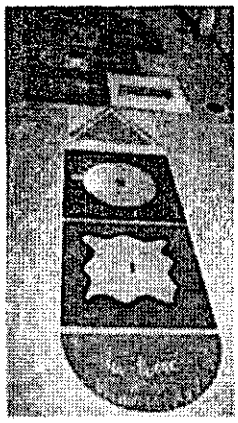
外来受付

病棟と同じように、外来の待ち合いスペースの何カ所かに音楽室があり、フェイクが飾られ、子ども達が飽きない様に、音楽家が音楽を提供する。木で作られているので親しみ易くあたたかな温もりが印象的であった。またあらゆる病気の人、あらゆる年齢の人が待つため、騒音にならないように、フェイクの奏でる音色はやさしくやわらい（写真-2)。

2) 各病棟での工夫

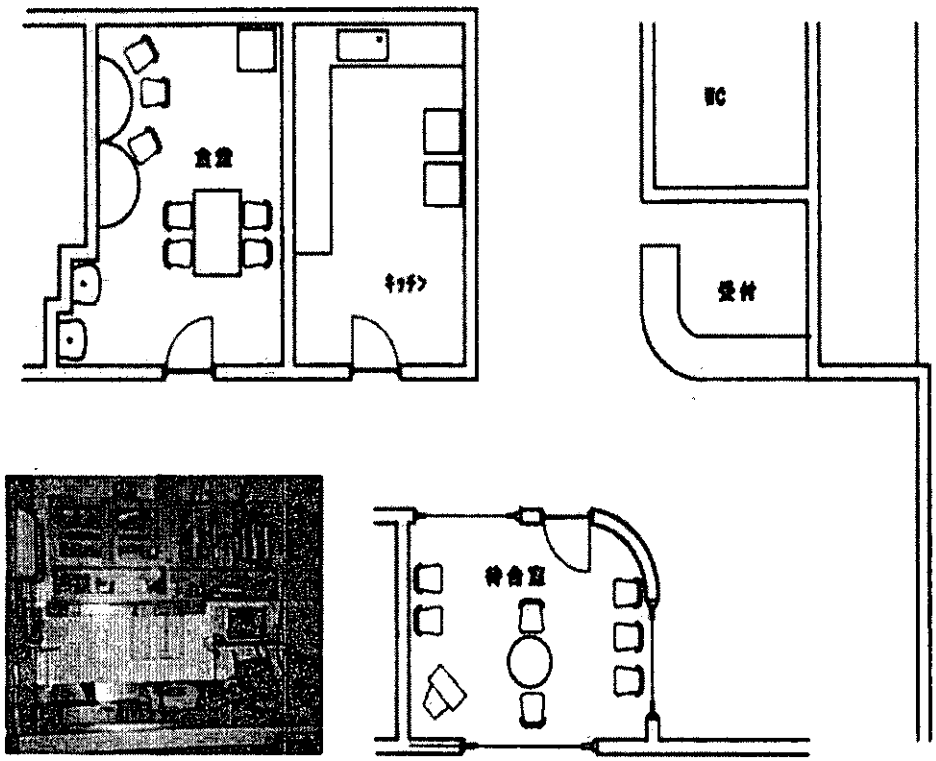
(1) 廊下に横断歩道

消化器肝臓外科の病棟では廊下の床面に横断歩道や信号のようなものが描かれており、そのそばに三輪車やゴーカートが何台か用意され、そこに描かれた交通規制に従って遊んでいた。この病棟では扱う病気の特性上入院期間が長くなることが多く、0-3 才まで病院生活という事が多々ある。そのような子ども達にあるべき発達を少しでも促す為の工夫の 1 つとして、病棟内で交通ルールを学ぶという説明



b e -3
廊下の床の絵

手術室前室の壁画



b e -4
病棟内のキッチンで子どもが親と一緒に
料理を作ることができる。

S＝1/100

5階　外科病棟

少し元気になった子どものために家族が食事を用意するキッチンと食堂、家族のための待合室がが用意されている。

ビセートル中央病院 -3

がされた（写真-3）。

(2)　キッチン

病棟内にキッチン（電気コンロ、冷蔵庫、レンジ、オーブン等が設置）があり、親と一緒に入院の子ども達が料理を作る事ができる。病院生活を日常の生活に近くするための工夫と思われた。作る事にも意味があるが作ったものをいつも面倒見てくれる医師や看護師、ボランティアにプレゼントするという喜びも得られるという（写真-4）。

(3)　病室からの眺望に配慮

人工換気療法中の患児や、各種の点滴ルートの多い子どもモニターのアラームがなるような病棟はなるべく広いスペースをとり、窓を大きくし外が眺められるようにするとのことであった。実際エッフェル塔や、ナポレオン寺院などが病室の窓から眺められた。

(4) 各病棟、プレイルームの装飾

クリスマス前であったので、各病棟ではクリスマスの装飾が、ホスピタルスクールの教師や看護助手、ボランティアによって行われていた。各病棟のプレイルームには遊具が設置され、また楽器付きパーティーションやテーブルなども親しみやすく配置されていた。病棟受付には入室前の緊張感を少しでも緩和出来るような雰囲気の絵が飾られていた（写真-5-8)。

2) プレイセンター (Maison de I' Enfant : 子どもの家)

各病棟のプレイルームの他に、子どもの家と称したプレイセンターが存在し、各病棟から子ども達が集まってきて遊ぶことが可能である。遊びの提供は、エデュケーターやボランティアが担当する。つぎの諸室から構成される。

(1) 勉強部屋

少人数で個別に学習を行う院内学級教室である。

(2) アトリエ

アトリエでは、子ども達が絵を描いたり、粘土で図工を楽しんだりする。パジャマが汚れないように作業着がいくつか用意されている。何時来ても絵が描けるように絵の具は随時用意されており、出来上がった作品は飾られる。描く事で内なる気持ちを表現できる。(写真-9)

(3) 遊びの部屋

この幼児プレイルームは、2 つに仕切られ、奥にはマットが敷かれ、子ども達が座っておもちゃを自由に広げて遊ぶことができる。手前の空間にはいすがいくつか並べられ、音楽療法も行われる。週に 4 回の音楽療法には、各病棟から子ども達が集まり、ボランティアや両親もともに音楽を楽しむ。

(4) キッチン

キッチンでは、子どもも親と一緒に簡単な料理やお菓子作りができる。

(5) 絵本コーナー

いろいろな絵本が本棚に並べられた絵本コーナーでは、床に座って読書できる。(写真-10)

(6) 小動物飼育コーナー

下の一画に 1 匹のモルモットが飼育され、子ども達が楽しみに餌を与えに来る。衛生上の問題、アレルゲンの問題等の質問をしたが、問題は生じてはいないということであった。

4) ファミリールーム

手術部の家族室には、テレビビデオ、ゆったりとしたソファが置かれ、クリーム色の壁面には、暖色系の色使いの壁画が描かれていた。無窓の室のため、壁画には、海や夕焼けなどの美しい景色が描かれていた。手術中の子どもを待つ親の不安を少しでも軽減するために工夫しているとのことであった。

ビセートル中央病院

室名	面　積（㎡）	対象年齢他	内装・備品・遊具・他	特徴
小児病棟プレイルーム	３５		音楽の壁 楽器を取り入れたパーテイション テント屋根の家、テーブル、イス お絵かき用ホワイトボード付 マガジンラック	ミュージシャンが週４回半日来て音楽を提供する。
小児科病棟新生児室プレイルーム	８	乳幼児	音楽の壁 ステンレス製鏡貼り壁 カーペット敷き床 幼児サイズのイス　オモチャ	廊下の突当りを柵で仕切り、カーペット敷きベビーサークルにしている。 幼児の背の高さにステンレス製の鏡を張り巡らせている。
５階脳外科プレイルーム	３５		音楽の壁　　手洗い器 くぐり戸付パーテイション テント屋根の家、テーブル、イス お絵かき用ホワイトボード付 マガジンラック	ミュージシャンが週４回半日来て音楽を提供する。
外来待合室	２１	乳幼児・児童	壁一面の絵 手作りの楽器を組み込んだ遊具 本　ベビーサークル　ソファ 幼児用マット敷きスペース	幅広い年齢の子どもと家族が利用するので 入口付近に音の出る遊具、コーナーに幼児用マット敷きスペース等色々な要素がある。
消化器肝臓外科		長期入院	廊下に幼児用自転車のための サイクリングロードの表示 プレイコーナー 三輪車	プレイルームから床のサインをたどると病棟内を回遊できる。
外科病棟待合室	１３	家族の為の部屋	イス　テーブル　テレビ オモチャ	近くにキッチンと食堂がある。 廊下側にガラス窓を大きくとってある。
キッチン	１５	患者と	流し台　冷蔵庫　電子レンジ	少し元気になった子どもの為に家族が食事を作

ビセートル中央病院「子どもの家」

室名	面　積（㎡）	対象年齢他	内装・備品・遊具・他	特徴
子どもの家	１７０		以下詳細	プレイセンター
幼児の遊びのへや	２５	幼児	壁：コルク貼り　柱：腰部分黒板 床：一部マット敷き オモチャ棚　柵　イス　テーブル 屋上テラスに乗り物、砂場、ベンチ他	室内をオモチャ棚や柵で４分割 電車を走らせるエリア、マット敷きエリア 等小さく囲われた場所を作っている。 壁には子供の写真多数
勉強部屋	２５	学童	パソコン　机　イス	
アトリエ	２２	学童	壁：コルク貼り 工作机　イス　絵の具等棚　流し	壁や壁際の棚には子どもたちの作品が並び、 工作机の上は作業中の絵の具などが広がっている。
絵のコーナー	５．４		壁：ベニヤ貼り 絵の具棚　イス	壁がそのまま画板になっていて、紙を画鋲で留めて絵を描く。
絵本のコーナー	５．４		座ソファ　絵本ラック（絵のコーナーとの間仕切りを兼ねる。	囲われたコーナーで足を投げ出して絵本を見ることが出来る。
キッチン	４	家族子ども	流し　電子レンジ　食器棚 カウンター　カーテン	カウンター越しに子どもの家のホールと対面できる。
ホール	１８	家族子ども	テーブル　イス　本棚 ままごとの家　オモチャ棚 小動物（モルモット）	家族が子どもを遊ばせたり、軽食をとったりできる。
事務室	１４.４			

1-2. 国立ネケル病院・マラド子ども病院

HOPITAL NECKER ENFANT MALADES

1）子ども病院ガイドブック

ネケル病院のシルビー医師からＡＰＡＣＨＥが編集した「フランスの子ども病院・小児病棟ガイドブック GUIDE de l'hospitalisation des enfants」(775ページ、「病院のこども憲章」の資料も含む）をいただいた。フランスには７５県あり、パリ市は２９区からなる。子どもを全国の各病院がどのように受け入れているか一目で分かる内容になっている。

この本をみると、最初に、子どもの診察においては大人と違い、特別な配慮が必要とある。小さな子どもはどこが痛いか話せないこともある。そのような患者に適切な診察と治療を行うことが小児科には求められる。患児が大変なときは専門家としての能力が必要になる。大切なことはプロのチームとしての能力である。小児医療のチームは小児を対象にして治療を行う専門家の集まりである。小児科は子どもの病気を治すというだけではなく病院と医療チームという構造上の能力が求められる。医療技術だけの問題ではなく人間、つまり子どもとその家族を受け入れるために準備されているところが小児科の病院である。病院では、常に、病気の子どもを感情を持つ一人の人間としてまず診ていく。一例として小児科医が白衣を脱いでピエロに変装して子どもと遊ぶことも大切だと紹介している。病院が抱える悩みを相談する時はＡＰＡＣＨＥが対応する。フランス全国にある病院の一覧が掲載され紹介されている。フランスはほとんどが公立の病院で、入院は無料であり社会保障が行き届いている。

2）.家族に配慮した空間

（1）休憩・プレイルーム

付き添う親たちのスペースであるＣＯＩＮ JEUX-REPAS 休憩・プレイルームには、看護師が描いた絵が飾られ、休めるためのソファは募金によって整備された。肝臓病の患者はここで調理をして食事の味付けを学ぶこともある。

（2）リカバリールーム回復室

回復室は、手術後の麻酔から醒める部屋であり、集中治療室の役割も果たしている。親の入室用ドアがあり、麻酔が醒めるときはなるべく親が付き添えるようにしている。状態が悪いとき、急患があるときには親は入れない。手術を受けた子どもは必ずリカバリールームで麻酔から醒めるのを待つ。

このリカバリールームは 1995～1997 年に改築された。以前はもっと暗く３つの個室に分かれていた。この部屋は１０人一度に収容できる。天井の大きなトップライトから光が入り、カーテンは自動的に開閉の調節ができる。置かれている機材は日本と変わらないが、スペースのとりかた、配置の仕方はゆったりしている。親が座ってゆっくり付き添えるように1床あたり 13 平方メートルとってある。

２０年前のリカバリールームは採光が弱く壁や床の色は濃い色のため暗かった。改築にあたり建築家とともに心がけたことは、部屋を明るくすること。使う色をも明るくした。このリカバリールームは１日に３０人の患者とさらに多くのスタッフが出入りする場所であり、清潔を保つことは感染予防の意味から重要である。その為にも明るい色の床や壁にすることにした。テクニック面だけでなく、快適な空間を持つことが大切である。快適な環境を保つために色彩が重要である。事務的な仕事をさばくため、中央に長いカウンターを設け、室内を見渡せる配置にした。リカバリールーム内スタッフ休憩室では、座ってお茶を飲みリラックスでき、大きなガラス窓から室内が見渡せる設計にした。

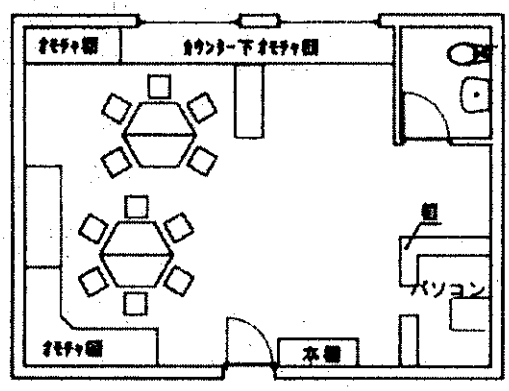
（3）救急治療室

緊急治療室には、救急で外部から直接入る場合と手術の為に入る時がある。外部からは交通事故、家庭内の事故でくる子どもが多い。

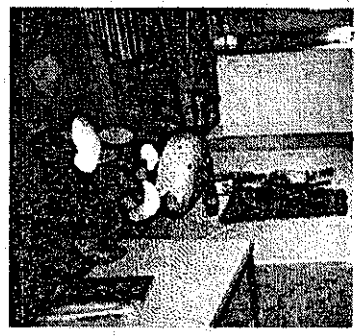
処置室には、救急車で運ばれたときに応急措置ができる部屋と両親が待機できる部屋が欲しかったが予算の関係で削られた。緊急治療室用の親の待合室は、外部に面した部屋にしたかったが予算の関係で窓のない場所になってしまったので絵で窓を描いた。子どもが死ぬかもしれないとき待っているのに閉鎖

このプレイルームは
リタイアした先生が運営している。

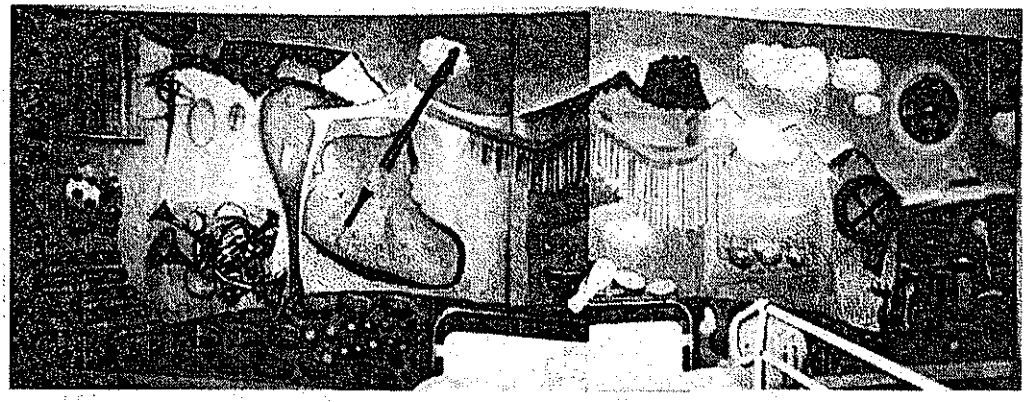
病室にいると子どもが受身になるので
プレイルームで自発的に動けるようにする。
子どもの為の心理学者が必ずいる。



5階（旧館）プレイルーム　S=1/100



「音楽の道」．楽器



手術を受ける子どもが麻酔を掛ける前にミュージシャンと過ごす部屋
壁の絵は「音楽の道」その道は手術室へ続いているというイメージ。

国立ネケル病院．マラド子ども病院 -3

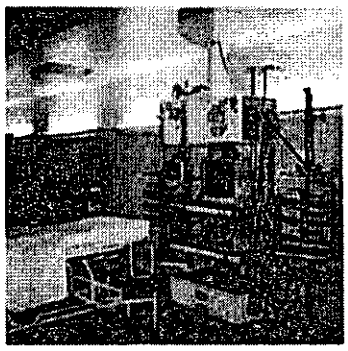
的な部屋は好ましくない。外に出て新鮮な空気が吸える場所にしたかった。

3）ミュージックセラピー

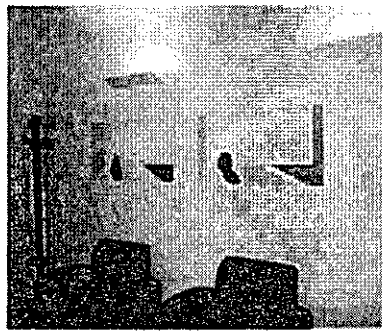
（1）手術部の音楽室

麻酔導入前の待合室である音楽室には海をテーマにした楽器壁画フレスコ・フェシクミュジックがしつらえられていた。この壁画はビセートル病院の壁画作者と同じ人が描いた。テーマは「道」で、その道は手術室まで続いている。道のまわりには木琴、トランペットや太鼓が配置されている。

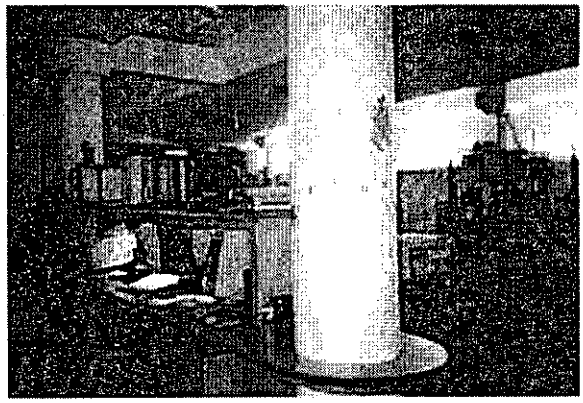
音楽室にははっきりした目的はなく、2、3歳から10歳くらいまでの子どもを対象として、精神的なケアを重視し、リラックスさせる場として使われている。11年前からミュージシャンの活動は行われたが、最初はどうなるか全く予想がつかなかった。この部屋にいる時間は子どもによって違う。手術の時間はかわってくる。病室で待つより静かで落ち着



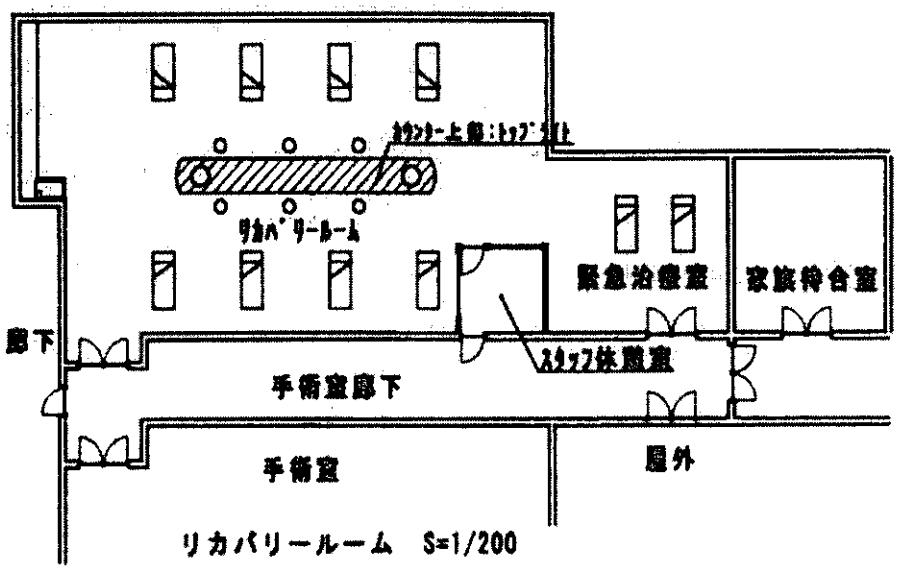
リカバリールーム



家族待合室



リカバリールーム内ナースセンター
上部トップライトから陽光が入る。



国立ネケル病院．マラド子ども病院 -4

くので麻酔をかけるまでここにいる。こどもの状態に合わせて麻酔をかける時間をずらす。患者というよりまず、小さい子どもであることを大切にしている。

ミジュコリエから派遣されたミュージシャンがギター、太鼓などを使って、フレスコ前で子どもと一緒に音を出したり歌を歌ったりして、手術前の不安を解消する。親も一緒にいられる。ミュージシャンと子どもの間には特別な関係はなく、出会ってすぐ親密な関係を築かなければならないので難しさがあ

る。子どもによっては、待っていることの不安が色々な形で現れる。急に恐怖心に襲われたり攻撃的になったりすることもある。そのため太鼓を叩いて心を落ち着かせる。

（2）ミュージシャンによるプリパレーション

SALLE DE MUSIQUE（音楽室）

「ATTENTION！！」　（注意）

手術部、楽器壁画のある音楽室に、音楽家と母親と男の子が一人いる。手術前なので、緊張した空気が漂う。見学できることは非常にまれなことである。

音楽家ピエール・ベニショーさんはジングルベルやさくらの曲を弾いていた。手術着に着替えた２～３歳の患児は木琴をたたいたり、おもちゃやブロック・車を壁画のラッパの管に入れたり、木管にいれたりして次に来る手術の不安を打ち消そうと懸命になって動き回っていた。心の叫びも聞こえてくる様であった。おもちゃのワニを投げる。この様に緊張しているときは太鼓を叩かせると緊張が緩和される。手術前の準備としては大切である。説明的ではなく精神的な関わりを大切にしている。ミュージシャンと子どもの関係は親密な特別な関係がすでにあったのではない。音楽を媒介として関わりを持つ。裸足で歩いても安全なようにクッションのある白いシートが引いてある。レントゲン写真を持ってきた外科医が子どもの状況を観察していた。

（3）フルート奏者のミュージックセラピー

ムジコリエ（Musicoliers）で音楽セラピーを行っているフルート奏者の佐藤真由さんはパリ国立高等音楽院留学中に、ギター奏者のピエールさんから彼女の教授宛に「音楽セラピーに興味がある学生はいませんか」という問い合わせがきた。約７年間、月に数回ネケル病院内で、小児科（幼児から１０歳まで）で時々、０歳児の生まれたばかりの子どもたちの病室でも、ギター奏者のピエールさんと共に、民族楽器も用いて子どもたちと音楽交流できた。はじめに各病室をまわり子どもとその親に挨拶する。その後いくつかの病室を選び訪問する。子どもにどんな歌が歌える。好きな音楽のジャンルは等聞いてまわる。最初は心を閉じている。知っている曲、合いそうな曲をアレンジしてみる。ギターをひいている間に民族楽器を子どもたちに持たせる。ナーバスになり心が固かった子どもたちがだんだんに心を開いてくる。長い目で見て効果をねらうのではなく、その場その場で一人一人にセラピーの心を通して心を開いていくかなりハードな仕事である。演奏者ばかりが楽しんではいけない。子どもによってはフルートより民族楽器が良いときもある。一人の子どもが心を開くまでの時間、ゆったりとした時間が必要である。

民族楽器の利点はだれでも音が出せて、どんな風に演奏しても自由である。日常生活の中ではあまり見たことがない楽器なので興味をもってもらいやすい。木を素材にしている楽器が多く、音が耳にやさしい。打楽器、リズム楽器が多い。人間にはリズムが大切で、０～３歳児は体を動かすことが好きなので効果的である。すぐに効果がでないと仕事として認められない。ミュージシャンとして心のケアもできることは大事である。しあわせになる一瞬、元気を与える基本を忘れてはいけない。

日本では音楽療法が仕事としては受け入れられていないのが残念である。フランスの病院では、芸術を尊ぶ文化が日常生活のなかに自然に生かされている。子どもが育つ要素に絵画や音楽は欠かせない視点である。

4）病院内教育（学校）

（1）概要

病院内学校は、１９２７年、結核が流行したリヨンで長期間学校を休まなければならない子ども達の為に開かれたのが最初である。現在リヨンの病院では高校生まで院内で教育が行われている。パリの病院は１６歳までである。マラド子ども病院では1969年医師の要求により学校が開かれた。病院と学校は管轄が違うので問題があった場合、馴れ合いにならずに意見を言い合う自由が確保されている。医療関係者と学校関係者の協力関係がうまくいくことが重要である。

（2）ボランティアの協力

病気を治すことが最重要であるが、ここは病室ではなく学校である。子どもたちは着替えて学校へ行く。6 才から 16 才までの子どもをみている。6 才から 11 才は義務教育である。1 日だけの入院でも子どもが望めば院内学校へ行ける。6 才から 11 歳までの教師は 13 人、中学部の教師は 4 人くらいである。中学部の先生を雇ったのはこの病院がはじめてである。それまでは「病院の学校」というアソシエイションのボランティアがやっていた。

1クラスにいろいろな年齢の子どもがいる。重病で病室にいる子どももいる。カリキュラムは一人一人違う。同じクラスに数学と英語の授業を一緒に行うことは難しいので個別指導が中心となる。アソシエイションのボランティアからも協力を得ている。

（3）教育の連続性が重要

先生がはじめに行うことは、・子どもの家族と連絡をとり子どもの今の状態を把握する。入院前の学校の先生と連絡を取り、学習内容を知る。どうやって勉強したいか子どもと話す。入院前と同じような環境が持てることが重要である。

フランスの法律では、子どもを元の教育環境に戻す義務がある。教育は全て無料である。子どもは教育を受ける権利があるので、前の学校がどこであるかは問わずに、国内、他国とも連絡を密に取る。前の学校の友だちとも交流している。教育全般は国が影響力を持っている。高校卒業資格は何処の高校を出ても同じ試験を受ける。病院内学校も同じである。施設管理は地方自治体がするが、教育内容、先生の採用は国が責任を持っている。

（4）脳外科の教育（脳障害の子どもの教室）

患者であることより、児童生徒であることを重視した環境を整備している。教室に入ったらここは学校である。設備的には幅広い学年の子どもに対応できるように教材は用意してある。個別指導に必要なパソコンなどは寄付でまかなわれている。ノートパソコンを病室に持ち込み、教師がベットサイドまで行き、指導する。

脳腫瘍、脳障害から来る精神的な問題を抱えている子どもが来る。脳の手術を受けるが、医学の進歩により入院期間が 15 日から 4 日半になった。学校は１９８３年から開かれている。小学生、中学生が同じ教室にいる。授業は個別指導。患者は脳に障害があるので退院してから学校の勉強についていくのが大変である。先生は1日の半分は退院後の学校をまわってそこの先生と話をしている。知的障害ではなく脳に障害があるためよく見えない、覚えていられないなどの認識の問題があることを説明しないと学校の先生も親も理解できない。同じ勉強の仕方では無理なので、それをどうやって補うか話し合う。教員は国家公務員であるが、劇遊びをする人、お話をする人、絵を教える人、ボランティアなど色々な人が関わっている。

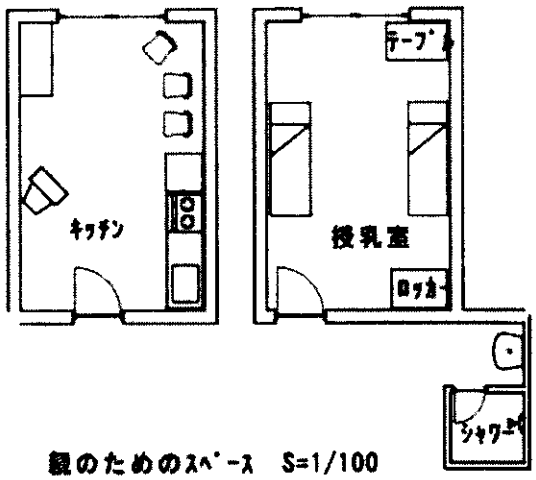
教員は一つの診療科に一人か二人で1年間は継続的に担当する。年度当初に希望を出して代わることができる。

5）ボランティア

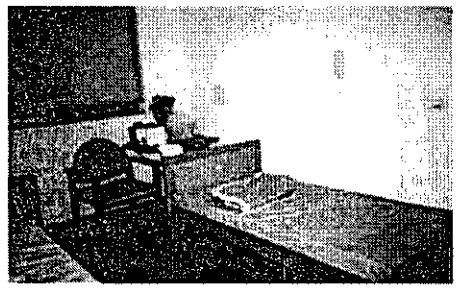
（1）ボランティア団体の概要

ボランティア団体は５０年前から活動している。リール地方で始められたが、それが評判になって各地に広がった。その目的は、病気の人たちに治療とは別の形で生きがいを与えて、病気で落ち込んだ気持ちを癒す事である。家族からはなれている人の孤独感をやわらげる。特にアジアやアフリカから来ている子どもは入院期間が長く、家族と離れていることが多い。子どもだけでなく大人も対象にしている。同じように活動しているボランティア団体はいくつも存在する。

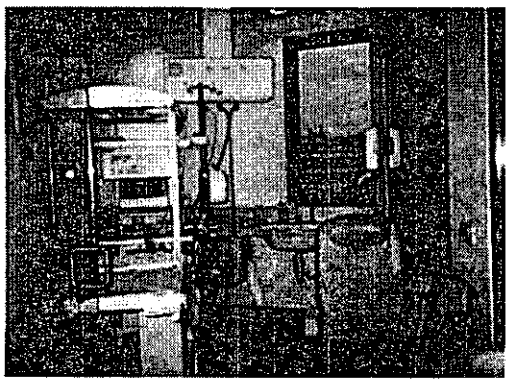
１６０の病院に約２０００人のボランティアを派遣している。子どもに関わるボランティアと高齢者や成人をケアするボランティアに分かれている。ボランティアの内容は「本を読む・子どもを寝かせる・マジシャン・スペクタル（お芝居）」である。アソシエイションではグループ毎に会合を開いている。アパッシュとの関係はない。予算は一年間に約５００フランで、資金はチャリティーやバザー・企業からの献金である。二人の職員の給与、ミュージシャンへの謝金、ボランティア保険を払い、セミナー（教育）開催のために資金を使っている。ボランティアは無償であるため退職した５０代後半の人達が多い。



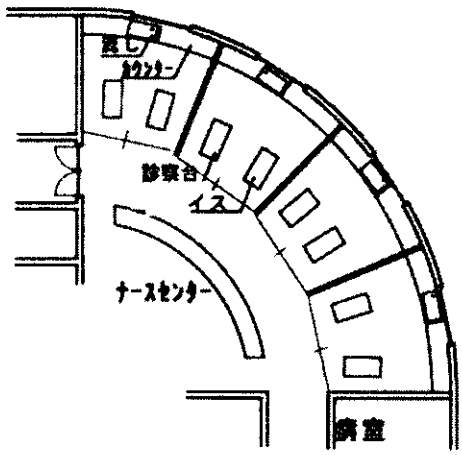
親のためのスペース　S=1/100



授乳室：母親がいつでも利用でき、
シャワーを浴びて休むこともできる。



先天性の障害を持っている子どもの病室
全面ガラスのドア越しにナースセンターから
見渡せ、大きな窓に面している。



0～3才　外科　S=1/200

国立ネケル病院．マラド子ども病院 -5

学生は短期間、就業者は2週間に1回行っている。

（2）ボランティアの活動とプレイルーム

各病院からボランティア団体に要請があってボランティアは病院に派遣される。病院職員と見分けられるように、ボランティアはピンクの上衣を着ている。病室でオブジェをつくるボランティアと外来の待合室を担当するボランティアがいる。小児科、アレルギー外来待合室の一隅が家具で囲われてプレイルームが確保されている。資金の補助が十分ではないのでボランティアが紙や絵の具を買ってきて、オブジェや季節に合わせたカードを作る。診療時間に合わせて午前 9：30～12：30 まで、午後は2：00～5：00 人数にはばらつきがあるが、一人半日で約 16～7人見ている。親はその間自由に出来る。ボランティアは時間が終わると物を全部戸棚にしまって鍵をかけて帰る。このプレイルームは窓に面していて良い環境であるが、診療科によっては窓がなく、薄暗い場所もある。

病院の改築予定があり、設計段階でボランティア団体の活動スペースを確保した。改築で 3 診療科が

Passeport pour l'Espace Plein Ciel, le Centre de loisirs des pré-ados et adolescents hospitalisés.

A partir de 9 ans. Exclusivement réservé aux jeunes hospitalisés. Les adultes sont invités à ne pas y séjourner.

Ce document est le lien entre le service Espace Plein Ciel et les services d'hospitalisation. Pour la sécurité du patient il doit être rempli en totalité.

Le jeune hospitalisé sera accompagné par un adulte (soignant, parent, bénévole) à l'aller comme au retour. En cas d'indisponibilité faire le 94060

Horaires : lundi, mardi, jeudi : 13h30 - 21h00 mercredi et vendredi : 13h30 - 18h30

Temps de service : Bâtiment :

Etiquette du patient Etage : Téléphone :

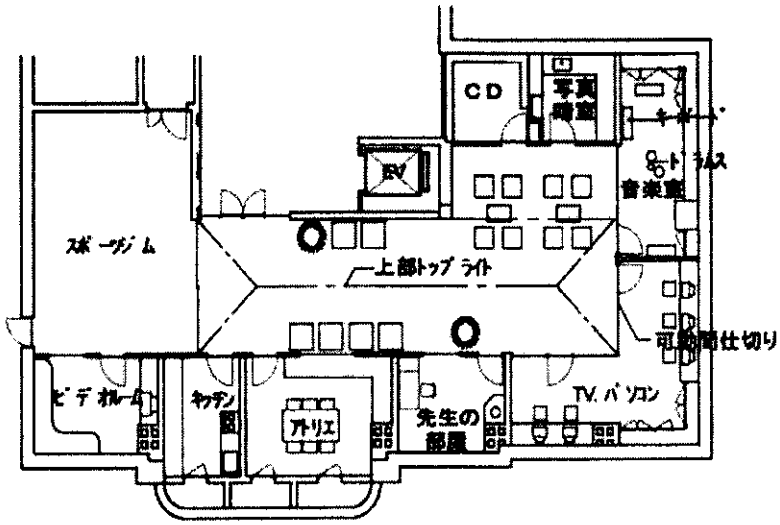
Service :

écrire lisiblement votre nom, signer et répondre par oui ou par non, merci !

date horaire	médecin	infirmière	accompagnateur	boisson	alimentation	sport	masque
日付 時間	医師	看護人	付き添い	飲物	食事	運動	マスク

A photocopier recto/verso Espace Plein Ciel 4ème étage Clinique Robert Debré Porte 31 Tél. : 94060 tourner la page ../..

満天の空間　パスポート
入室の前に提出する。



満天の空間（若者の文化センター）平面図1/200
国立ネケル病院・マラド子ども病院 -1

統合されるので待合室もかなり広くなる。

（3）ボランティアの募集の過程と研修

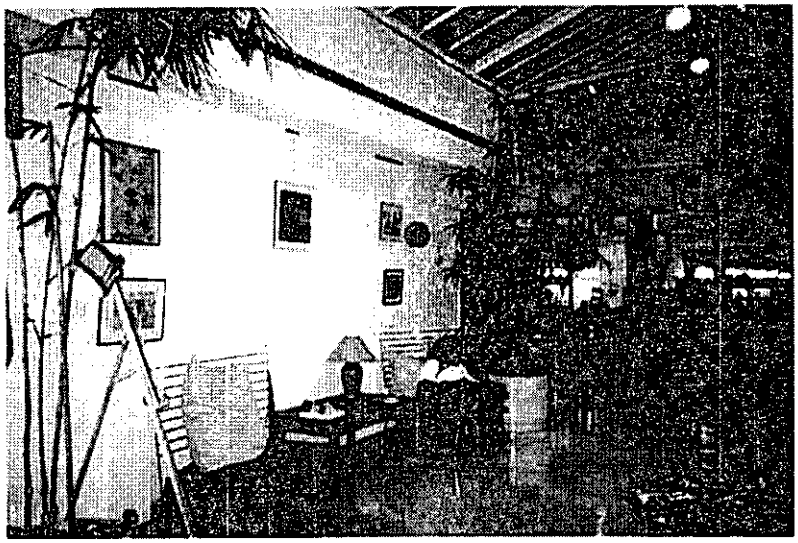
① ボランティア希望者はセンターに申し出る

② 心理学者と会い、ボランティア希望の動機を説明する。

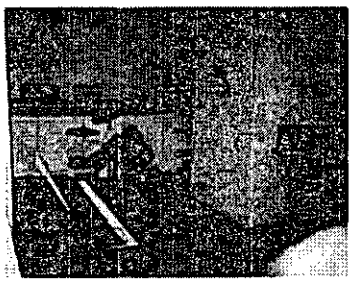
③ 面接で適正か審査される。その結果、具体的な活動の場所、時間などが決められる。年二回研修の機会がある。そこで遊び、遊具に関して学び、心理学者などが開く会議で、病院との連携、子どもとの関わりなどについて学ぶ。

写真暗室
壁には子どもたちの作品が貼ってある。

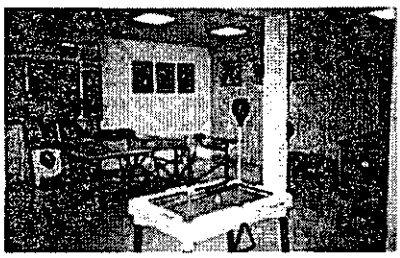
テレビゲーム室



ホール：天井のガラス越しに陽の光が降り注ぐ



音楽室
キーボードやドラムセットがある。



トレーニング室

Espace Plein Ciel（満天の空間）

国立ネケル病院，マラド子ども病院 -2

子どもたちが外の世界と離れないように新しい情報を仕入れる。病気の重い子やターミナルの子どもにもボランティアは接する。双方に精神的なケアが必要になる。ボランティアには1～2ヶ月間の試用期間がある。素人であることをむしろ活かすようにしている。病院のボランティアは医療者の仕事の邪魔にならないように配慮する。その期間で適しないと思われる人は他のボランティア団体を紹介している。

国立ネケル病院・マラド子ども病院

室名	面　積（㎡）	対象年齢他	内装・備品・遊具・他	特徴
音楽の部屋	３５	１０歳位まで	音楽の壁 床：一部マット敷き イス 照明：音楽の壁に光を集め、部屋全体は暗め	手術を受ける子どもが麻酔をかける前にミュージシャンと過ごす部屋
リカバリールーム	１４５	１０床	大きなトップライト　明るい内装 ガラス張りのスタッフ休憩室設置 中央にナースステーション	家族が座って付き添えるよう１床あたり１３㎡とってある。 広く、明るく、清潔
緊急治療室	３０		手術台２台	リカバリールームに隣接 外部から直通の入口を持つ
家族の待合室	２５		壁画　テレビ　ソファ	緊急治療室用家族のための部屋 窓が無いため壁に絵を描いている。
新生児病室	６０	0～３歳	セミオープン　大きなガラス窓	先天的な障害を持つ子どもの病室 全面ガラスの建具越しにナースセンターから見渡せる。
授乳室	１６		ベッド２台 テーブル　ロッカー シャワーブース、手洗い隣接	母親がいつでも使え、シャワーをあびて休むことが出来る。
キッチン	１６		流し台　冷蔵庫　電子レンジ テレビ　イス	付き添いの家族が使う。
プレイルーム	４４	９歳まで	トイレ　手洗い ままごとの家　オモチャ棚 本棚　工作机　イス　パソコン	リタイアした先生が運営している。 子どものための心理学者がいる。
外来待合室プレイルーム			待合室の一隅を家具で仕切る。 机　イス　収納戸棚	ボランテイアアソシエイションが運営
院内学級（脳外科）		６歳～１６歳	作業机　本棚　備品棚　パソコン	各病棟の院内学級に先生、お話をする人、絵を描く人などがいる。授業は個別指導 退院後も地元校へ教師を派遣し支援。

国立ネケル病院・マラド子ども病院「満天の空間」

室名	面　積（㎡）	対象年齢他	内装・備品・遊具・他	特徴
満天の空間	２０８	９歳以上	以下内訳	プレイセンター
トレーニング室	３８.５		卓球台　筋肉トレーニング設備 ビリヤード台　サッカーゲーム	ホールと各室の境の間仕切りはガラス貼りで ホールから各室内の様子が良く判る。 トレーニング室、コンピューターゲーム、パソコン室とホールの境は可動で開放してイベント等を行う。 入り口で記名　入室カード提出 エデュケーターがプログラム、施設を管理
ビデオ鑑賞室	１３.５		大型テレビ　ビデオ棚 ソファ	
キッチン	８．８		流し台　冷蔵庫　オーブン 調理器具	
アトリエ	１７.５		作業机　作品棚	
先生の部屋	１２.３		机　イス　棚　だんろ	
コンピューターゲームパソコン室	２５		ドリームキャスト、 プレイステーション パソコン	
音楽室	１８		壁：防音装置 キーボード　ドラムセット	
写真暗室	７．５		暗幕　流し　引伸ばし機　写真用品	
ラジオ局ＣＤ庫	６．３		ＣＤ棚　放送設備	
ホール	６０.６		ガラス屋根 ソファ　観葉植物	

2．イギリスの子ども病院とホスピタルプレイ

2.　イギリスの子ども病院とホスピタルプレイ

2-1.グレートオーモンドストリート子ども病院

12 月 5 日、1952 年に設立され、ロンドン市内最大のこども病院であるグレートオーモンドストリート子ども病院を見学した。

1）プレイサービス

グレートオーモンドストリート子ども病院は、総病床数 350 床、22 病棟からなるロンドン市内最大の子ども病院である。Lasly Nilson 氏（プレイスペシャリストマネージャー）に説明を受けた。

本病院のプレイサービスは 1970 年後半から設置され、プリパレーションは約 1 7年前から提供されている。放射線部では、当初、プレイスペシャリストはパートタイムであったが、病院におけるプレイの必要性が見直され、ニーズが高まったため、8 年前から月曜から金曜日のフルタイムで担当するようになった。各病棟に 1 人以上のプレイスペシャリストが配属され病棟の子ども達に遊びを提供している。

プレイユニットは、乳幼児用向けと思春期の子ども用があり、後者が使い易いように毎夕 2 時間程特別に年齢にあった遊びを提供し、週に 2 回は彫刻、絵画、コンピューターなどの講習会を開く。

病院のプレイ、プリパレーションのビデオはプレイセラピストにより作成され市販されている。

2）各病棟案内

病棟が内科病棟、外科病棟、呼吸器病棟などではなくライオン病棟，　きりん病棟、きつね病棟、　いるか病棟(NICU)、など動物の名前を使用していた。廊下には、病棟名になっている動物の足跡が描かれているのでそれをたどれば各病棟に行き着く。（写真-1，2）病院内の壁には森林をイメージした絵が描かれ、孔雀やトラなどの様々な動物達が親しみ易い表情で描かれていた。

①神経内科病棟（とら病棟のプレイスペシャリスト：T.Fox 氏）

T.Fox 氏は、エジプトからプレイセラピスト養成コースにて研修し、初めて資格を得た人物であり帰国後はエジプトでプレイスペシャリストとして働く予定という。病棟内の天井にはクリスマス用のデコレーションが施され、このような飾り付けは季節毎変化させるようにしている。

大きなタペストリーが飾られていたが、これは入院中の子どもの母親達が空いている時間を使って作った作品であるということ。入院も長期に渡ると親のストレスも様々な面において生じ、その気持ちを少しでもやわらげる為の 1 つの配慮であると思われた。（写真-3）またホスピタルスクールのインフォメーション、今週の講座や時間割りなどが掲示されていた。

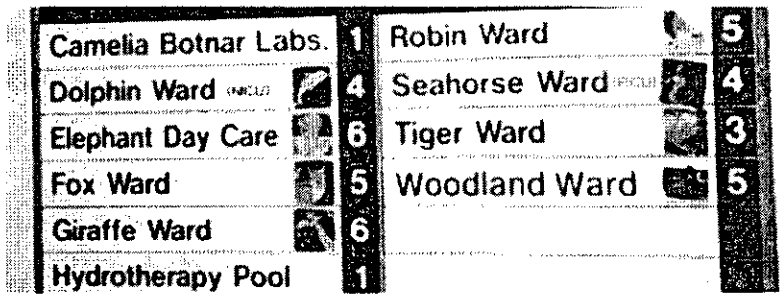
病室には子どものベットの隣に親のためのベッドが置かれカーテンで仕切る事ができるようになっていた。（写真-4）カーテンは水色で海をイメージしたデザインで統一されていた。

病棟内にキッチンが設置されており、冷蔵庫、2 個の電気コンロ、オーブンレンジなどが置かれ、両親や子ども達が簡単な料理ができるようになされていた。

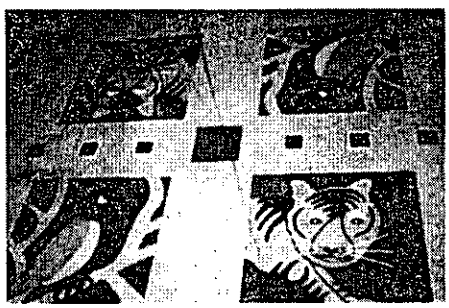
プレイルームには専門の管理者（ボランティア）が 1 人駐在し、おもちゃや絵本の管理を行なったり、一緒に遊んだり、親が時間を空ける時に子どもをみたり、また理学療法の時の手伝いをしているとの事であった。中央には、お絵かきをしたり、ものを作ったりするテーブルがあり、またママごとができるキッチンスペースがあり、おもちゃのお皿やフォーク、オーブン、調味料、缶詰など沢山のおもちゃが置かれていた。イギリスではこういったままごと用のおもちゃが豊富であるとのことであった。また壁に組み込まれた本棚には沢山の本や、パズル、カードゲームが置かれていた。おもちゃは紛失が多いがそれはもう日常茶飯事なのであまり問題にされないが、清潔を保つ為に使用したおもちゃはその日の内に消毒を行い、特別な感染症の子の使用したものは、そのままその子にプレゼントするということであった。

②感染免疫病棟（Play therapist ： Rachel　）

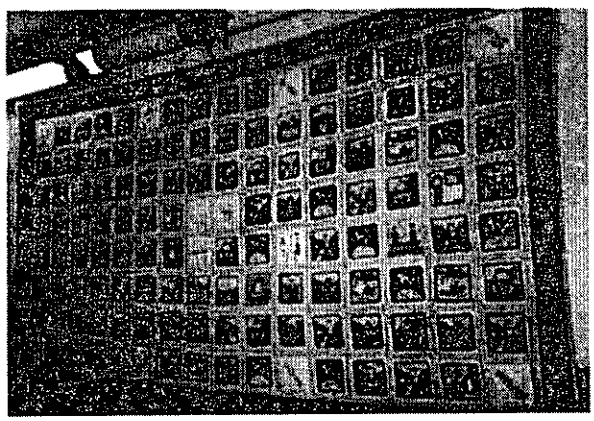
個室が 10 床あり重症免疫不全症の子ども達が



go -1　動物の名前の病棟名



go -2　廊下の床のサイン



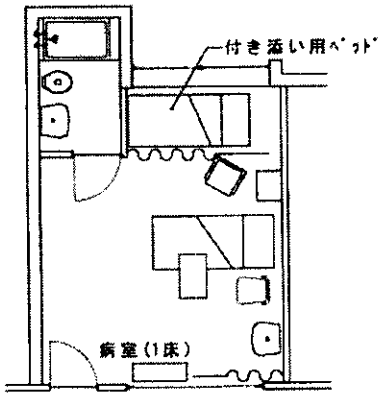
go -3　入院中の子どもの母親たちが作ったタペストリー

グレートオーモンドストリート子ども病院 -1

入院する病棟。免疫不全症の子が入るためプレイルームで皆で遊ぶ機会は非常に少なく各個室に遊具が用意されていた。各個室には空気清浄機がおかれ、入室児には必ず手洗いが必要であった。付き添いの方のための大きなベッドがあり、カーテンで仕切ることが可能になっていた。免疫不全の子が骨髄移植等をすると入院期間が長く非常に厳しい化学療法に耐える必要があるため、外界の景色が見える場所を選択しているとのことであった。

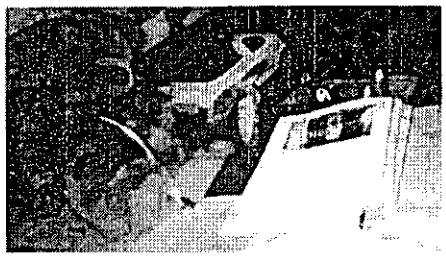
③胸部外科、内科

心臓、肺の手術前後の児の入院が多く、特に入院した直後すぐに手術を控えている子ども達への心のケアが重要であるとのことであった。また重症な児も多く医師、特に看護師とのコミュニケーション

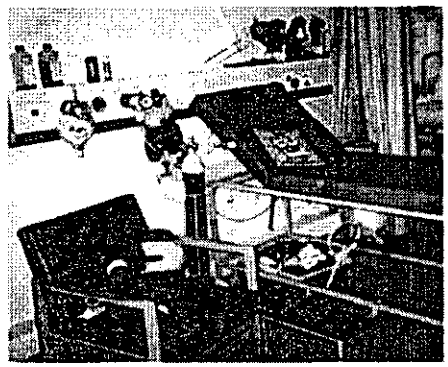


病室平面図　1/100

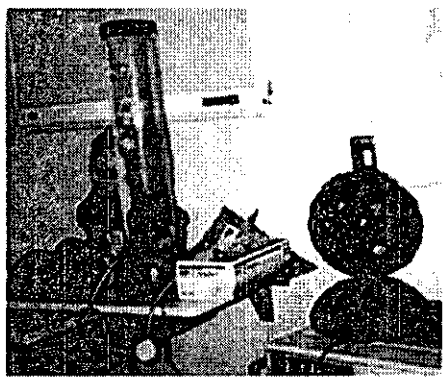
g o -4　病室（個室）
病室は広く、付き添いベッドも設置されている。
カーテンで付き添いベッドを仕切ることができる。



熊のぬいぐるみとカテーテル



g o -5　プリパレーションツール
処置室にはプリパレーション用の
人形が置いてある。



グレートオーモンドストリート子ども病院 -2

が非常に重要であると述べた。お人形を使い血管カニューレ、酸素マスク、点滴ルートなどの説明を行い、手術前には写真などを使い手術室を説明し、プリパレーションを行うという事であった。

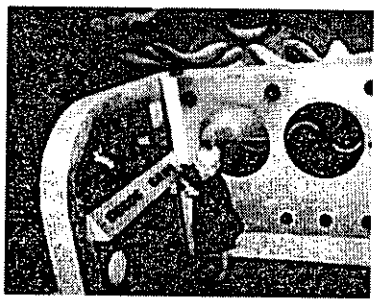
また必要であれば両親は勿論、きょうだいも含めた説明を行い、遊びも提供する。

とにかく手術前の大きな不安で緊張した気持ちの子ども達に対し、どのように近づき接するかがその後の親密な関係を築けるかの大きなポイントになるという事であった。

④血液腫瘍病棟；ライオン病棟（プレイスペシャリスト：Jessie）

長い化学療法のため入院期間も長くなり、院内でのストレスも多く、最もプレイセラピーのような心の癒しが必要な病棟であるとのこと。

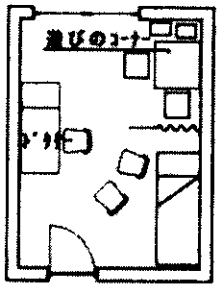
プレイルームには大きなテーブルがあり、そこで自由に絵の具でお絵かきが出来るようになってい



待合室の幼児の遊びのコーナー

g o -6　外来
待合室プレイルームは幼児向けと
学童期以上の子ども向けがある。
中庭は大きなテント屋根がかかり、
雨の日も遊べるようになっている。

中庭の遊具



診察室　S=1/100

g o -7　診察室
診察室は広く、落ち着いた雰囲気。付き添いの為のイスがいくつか用意されている。
子どもが飽きないように遊びの場が設けられている。

た。さらに窓際には 3 歳ころまでの子が座って遊べるスペースが区切られており、様々なおもちゃが置かれていた。特に家の様にベッドルームやキッチンなどといった区切りがありオーブントースターや電話器など、友だちや親と一緒におままごとなどをよくするという事であった。

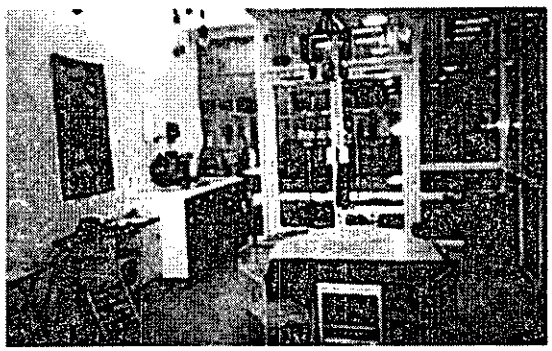
さらにその奥には学童以上の思春期の子達がコンピューターやテレビゲームで楽しめる部屋があり、がらりと雰囲気が変わった。

やはり難しいのは思春期の子達の心のケアであり今後の大きな課題であるということであった。

長期化学療法中には中心静脈による薬剤投与が必要であり、中心静脈（IVH）を要する子ども達のためのプリパレーション用の人形があった。ダブルルーメンの本物のカテーテルがテディベアの胸部に留置され、いつでも子ども達がそれを使ってお医師さんごっこができるように工夫がなされていた。

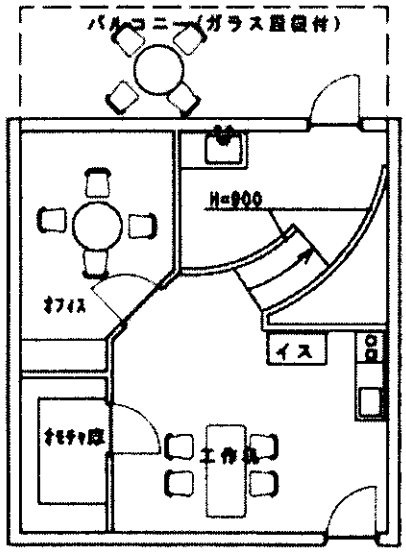
(写真-5)

また経鼻胃管チューブの必要性やどこをどのように通過し、どこに留置されるのかを図や写真で示

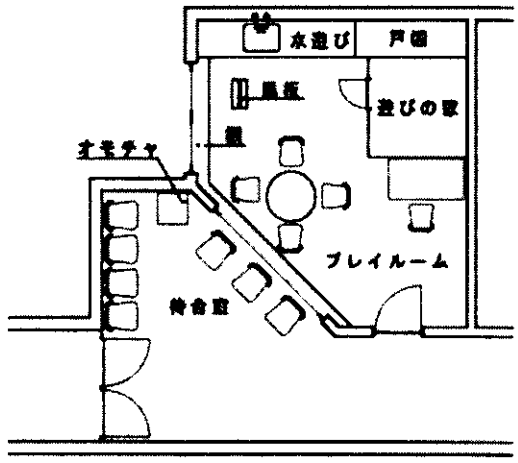


ガラス張りの明るいプレイルーム

ままごとのキッチン



血液腫瘍病棟
プレイルーム　S=1/100



心臓病外来　S=1/100

グレートオーモンドストリート子ども病院 -4

したパンフレットが、同場所においてあり、その中には実際チューブが留置されている男の子が笑顔で写っている写真が飾られていた。

処置室は点滴、採血などに加えてこの科では骨髄穿刺をする事も多く大きな不安や恐怖を覚える子も多いため distraction の工夫が必要であるとのことであった。ライトを使った光るボールや、ぬいぐるみ、音の出る絵本などが沢山置かれていた。

こまごまとしたおもちゃは箱に入れ“宝の箱”と名付けていた。

⑤検査のための入院病棟（プレイスペシャリスト：Piers）

内視鏡、造影検査、MRI,CT など画像検査、また負荷テストといった検査のための短期入院の病棟には2人のプレイスペシャリストが配属されていた。

幅広い疾患の子ども達が入院するが期間は非常に短期であるのが特徴で、比較的全身状態の良い子ども達が多いのでプレイルームも広いスペースを用意し、また検査のためのプリパレーションを施行するという事であった。壁には様々な検査の説明がパンフレットとして用意されており自由に取る事が出来た。

⑥手術室

移動中に手術室の入り口から中を一瞬見たが、

手術室の天井や壁にもクリスマス用のデコレーションが施されていた。

3) 外来

壁には子どもの目線にあわせた低い位置に綺麗な模様の絵が連続的に描かれていた。

幼少児向けのプレイルームと学童期以上の子どものためのプレイルームが存在していた。学童期以上の子どものプレイルームにはビリヤードのミニ版がおかれテレビゲーム、ビデオがおかれ、壁にはミュージシャンやアーチストのポスターが張られていた。所々にコンピューターゲームやスペースシャトルのような中に入って遊べる宇宙船や、カーレイルのようなおもちゃが置かれ、また中庭は遊園地のような乗り物やバスケットゴールがおかれていた。(写真-6)

診察室にも子どもの遊び場が存在し、医師の長い説明の時など、子ども達が飽きないような工夫がなされていた。(写真-7)

診察、検査前の緊張した時間、検査結果待ちの空いた時間に少しでも子どもたちの気が紛れるような工夫が至る所に施されていた。子ども達が不安が軽減されればそれを見守る親の心持ちも少しは軽減されるのだろうと思われた。

4) プレイセラピー科

①コンピューター室

世界各国の病院とインターネットで通信可能であり、主に年長児が利用する。コンピューターは 3 台設置されていた。

②プレイルーム

中を進むとまず大きなテーブルといすがあり、クリスマス用のデコレーションを作成中であり様々な道具が置かれていた。病棟から来た子ども達とプレイセラピストが一緒にものを作りそれを病院に飾る。(写真-8)

さらに奥には音楽室があり、ドラム、電子オルガン、ピアノ、等が設置されていた。その隣には図書室があり各年齢に対応した絵本が 2 面に渡る本棚にぎっしりと置かれ、中央にはテーブルが設置され、いくつかのいすが用意されていた。とにかく本の種類の多かった。(写真-9)

③お医師さんごっこの部屋

更に中央にはお医師さんごっこコーナーがあり、コットの中にお人形さんが寝ており点滴でつながれていた。その周りには聴診器、注射器、血圧計など本物とおもちゃが入り混じって置かれていた。

またレントゲン写真、人間の骨のことなどが子ども達にわかりやすいように、しかも恐怖感を増幅させないようなキャラクターを用いて説明されていた。特に骨の説明にはフエルトを用い簡単に取り外しが可能であった。また手術着や白衣、手術室用のマスクやキャップが置かれ、子ども達のサイズにあわせて作られており子ども達がお医師さんごっこが自由にできるようになっていた。

(写真-10, 11)

④思春期の子のためのプレイルーム

カーテン、飾り付けは落ち着きのある色が用いられていた。有名で人気のあるミュージシャン、芸能人などのポスターが貼られていた、雑誌、ビデオ、テレビなどが設置されており、自由に使用できるとの事であった。しかし乳幼児に比較すると利用率は低く、学童期以降の思春期の子ども達の入院中における心のケアをどのように対応していくか非常に大きな課題であることを述べた。(写真-10)

5) ホスピタルスクール

20 人の先生が駐在し、5 歳以上 16 才までの教育を担当する。基本はホスピタルスクールに登校するといった形態で教育するが、重症度の高い病棟から離れることのできない子ども達には先生が病棟に出向いていくということであった。文部省の管轄になり、日本と違って入院前の学校から転校するといった形を取らなくても入学できる。

入院中はとにかく外界と遮断された環境である為、なるべくインターネットなどの通信手段を使い社会への関心を促している。また今後はテレビ電話やサテライト授業を本格化し、他の学校や病院の子ども達との交信が自由にできるような設備が計画さ